
そして天使は舞い降りた

沖津渉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして天使は舞い降りた

【Nコード】

N2050M

【作者名】

沖津渉

【あらすじ】

「なんで奏は生徒会長になったんだ？」音無は尋ねる。

音無や日向、ゆりがこの世界に来るよりも前、奏がまだ天使と呼ばれていなかったとき、奏はある一人の少女と出会った……

Angel Beats！サイドストーリーにして前日談。

奏が天使と呼ばれるようになったわけ。

プロローグ

「なあ奏、聞いてもいいか？」

「なに？」

「なんでお前は生徒会長になったんだ？」

「どうして？」

「だって、どう見ても生徒会長って柄じゃないだろ。どっちかと言うと奏は書記とかのほうが似合ってる気がするんだけど」

「そうかしら？ でも、生徒会長のほうが色々と便利だし」

「この世界のみんなが満足して消えることができるって目的のためにか？ そりゃあ確かにそのことについては俺も賛成だ。一緒に手伝っていくつもりでもいい」

「うん。ありがとう、結弦」

「いいって。それについても、俺は記憶を取り戻すことで生前の自分に満足して、それをみんなにも感じてもらいたって思ってる。でも、お前はどうか？ どうしてお前は戦線の人々と敵対してまで一人で戦い続けてきたんだ？」

「うん。あのね、約束したの」

「約束？」

「そう。約束」

「誰と？」

「私の大切な――友達と」

プロローグ（後書き）

Angel Beats! 放送終了記念に書き始めました。
全13話というとても短い話の中では語り尽くせないものもあった
でしょう。

それを想像して文章に起こしてみようと考えています！
まだプロローグは短いですが、これから書き続けていきたいと思っ
ます。

果たして奏の決意はどこからやってきたのか？
よかったらこれから先も読んでいって下さい！

その？ 出会いは麻婆豆腐と共に

ここは死後の世界。

生前の未練が楔くさびとなって、消えることの出来ない者たちが集う世界。

音無や日向、ゆりがまだこの世界に来る前、奏はこの世界で日々を過ごしていた。

「起立、礼——」

今日も授業が終わる。

奏はいつものように一人で食堂へ向かおうと、荷物の整理をする。目指すはもちろん、麻婆豆腐だ。

「いい加減にしてよ！」

鞆に教科書を詰め終わり、立ち上がろうとしたときである。怒声と共に、奏の机に女子生徒が衝突する。

「いっつー……」

ぶつかってきた女生徒がうめく。背中を机に打ち付けてしまったようだ。

この世界ではこれ以上死ぬことはないが、きちんと痛みは感じる。大丈夫だとは思いながらも、奏は立ち上がることを忘れてその少女を見ていた。

「もう私たちに付きまとわないで！」

彼女の前には三人組みの女生徒たちが立っていて、その中央にいた少女が彼女を怒鳴る。どうやら彼女はその少女に突き飛ばされたらしい。

「……………っ！」

「な、なによ……」

うずくまっていた少女は自分を突き飛ばした相手をキッと睨み付けると、なにも言わずに教室を飛び出していった。

「ふ、ふんっ！ これっきりにしてもらいたいわね」

「どうしたの？」

奏は残った三人組みに尋ねる。

先ほど声を荒げていた少女が奏に気がつき、騒がせてごめんなさいと一言謝罪を口にした後に続ける。

「立華さんは彼女のこと知らない？」

「えっと……ごめんなさい」

奏は積極的に人に接するタイプではないせいか、教室にいる生徒全てを把握しているわけではなかった。生徒が消えていき、新たに未練に縛られた生徒が増えていくこの学校ではなおさらだ。

「無理ないかもね。彼女——笹原さんはついこの間ここに来たばかりだから」

「笹原さん……」

申し訳ないことだが、聞き覚えのない名前だった。

新しく学校にきた生徒は特に自己紹介などをするでもなく、いつの間にかその席が用意されている。出席確認のときに名前が呼ばれていたかもしれないが、少なくとも奏は覚えていなかった。

「笹原さんはね、こういう言い方はどうかと思うけど、ちょっとわがままなのよね」

「わがまま？」

奏の疑問に答えるように、左右の女子たちが口を挟む。

「そうそう。わがままだし強引なんだよね」

「今日だって一緒にご飯食べようって言って、嫌がる私たちの腕を無理矢理つかんで引っ張っていかうとするし……。きつと自分のことお姫様かなにかだと思ってるのよ」

「そう……」

奏は教室のドアを見やる。

笹原が開け放ったままになっているドアを見ながらにかを考えいていたが、お腹が空いていたことを思い出して、そのドアから教室を出て食堂へと向かった。

授業が終わってすぐの食堂は大勢の人で賑わっており、食券一枚買うのにも十分ほど並ばなければならなかった。

迷うことなく麻婆豆腐の食券のボタンを押すと、それを持って再び列に並ぶ。この方法は非効率的不是なではないかと思うが、食券がない場合はこの後レジに並ぶことになるのだから、結局は同じことなのかもしれない。

ようやく奏は麻婆豆腐を食堂のおばさんから受け取り、皿を乗せたトレイを落とさないようにしっかりと両手で持つ。麻婆豆腐はいつもと同じように真っ赤に燃え上がり、マグマのように煮えたぎっている様と刺激的な香りがなんとも食欲をそそってくる。

奏は早速食べようと辺りを見回すが、席は人で埋まっており座る場所を見つけることができない。

このままではせつかくの麻婆豆腐が冷めてしまう。

奏がわずかな不安を抱き始めたとき、ようやく空いている席を一つだけ発見することができた。

「あ……」

「ん？」

他の誰かに取られないように急いでトレイを机に置き、ふと隣の席を見ると、そこには笹原がいた。

笹原は驚きの声を漏らした奏を、スプーンを咥えたまま不思議そうな顔で眺める。その前にはカレーの皿が置かれており、半分くらい食べ終えた後だった。

「えっと、ここいいかしら？」

「いいわよ。別に誰も待ってないし」

素っ気なく返すと、笹原は再びカレーと格闘を始める。スプーンを口に運ぶたびに「くう」と唸^{うな}り声を上げ、コップの水を口にする。

奏も座って麻婆豆腐を食べながら、その姿を横目で見る。あまりにもおいしそうに食べているため、つい疑問が口から漏れる。

「辛いのが好きなの？」

「えっ？ う、うん」

奏が尋ねると、すでに奏を意識の外に追いやっていたらしい笹原は少し驚いた様子で答える。

「辛いものってさ、食べると体がかぁーっと熱くなって、生きてるーって感じがするんだよね。まあ死んでるんだけどね。あはは。でもこのカレーって本当に辛いよね。でもおいしい！ 癖になっちゃうそう。水がないと、とてもじゃないと食べられないけどね。あつ、あなたは麻婆豆腐なのね。それもすごく辛そう。もしかしてあなたも辛いのが好きなの？」

「え、そうね……」

スプーンを片手に、堰^{せき}を切ったように話し続ける笹原に奏は呆気にとられる。

「ねえ、ちょっとそれ一口ちょうだいよ。いいかな？ いいわよね。うん、オッケーオッケー。それじゃ、いったきまーす」

奏の返事を待つことなく、笹原は勝手に奏の麻婆豆腐を横からスプーンですくい取り、口に入れる。

「んんっ!？」

口に麻婆豆腐を含んだ瞬間、笹原の動きがピタリと止まる。

顔色がみるみる真っ青に、そして真っ赤にと、信号機のように変化していく。

「げほっげほっ！ な、なにこれー！ ちょ、み、水！ 水!！」

体の自由を取り戻した笹原は、思いつきり顔を歪めて跳ねるようにして水へと手を伸ばした。

自分の水だけでは足りなかったらしく、止める暇もないままに奏の水まで飲み干した。

「み、水う……」

「はい」

それでも口の中の火事が収まらなかったようで、見かねた奏は水差しを取ってくると笹原のコップに水を注いでやる。

「んくっんくっんくっ……ぷはあっ！ あー、生き返ったー……」
笹原がげんなりする。舌を出して、両手で顔に風を送る。

「私の麻婆豆腐食べた」

「え？ ああ。ごめんごめん」

むくれる奏に笹原が謝る。誠意のこもってない軽い謝罪に、奏は繰り返す。

「私の麻婆豆腐……」

「だからごめんって。それにしても、あなたよくこんな辛いもの食べられるよね。こんなの食べるの普通じゃないって」

奏はじつと笹原を見つめていたが、やがて視線を麻婆豆腐に戻し、黙々とスプーンを動かす。

次々と麻婆豆腐をすくっては口に運んでいく奏を、笹原は目を丸くして眺めていた。

「あなた、辛くないの？」

「辛いわ。だけどー」

そこで奏はスプーンを一旦置くと、笹原の目を見て答える。

「うまいわ」

言い終えるとコップの水を一口飲み、再びスプーンを手取る。

「うーん、確かに言われてみればおいしかったかもしれないけど……」

でもやっぱり私には無理ね。笹原はそう言ってカレーを食べ始める。

「ところで、あなた名前は？」

カレーを口にしながら笹原が尋ねる。

「立華。立華奏」

麻婆豆腐から目を離さずに奏が答える。

「立華さんか。私は――」

「笹原さん」

「え？」

「笹原さんでしょ？」

「え、え？ どうして私の名前知ってるの？　ねえ、なんで？」
笹原が驚く。

「だって私たち、同じクラスだもん」

とは言っても、つい先ほどまで奏も笹原のことを知らなかったわけだが。

「え、そうなんだ。いやー、立華さんあんまり目立つタイプじゃないから覚えてなかったよ」

あっけらかんと笹原は言い放つ。酷い言い草だが、確かに一理あるため反論はできなかった。

「じゃあさっきの教室のも、もしかして見てた……？」

「うん」

不安そうに聞く笹原に、奏は意趣返しのように頷く。

笹原は溜め息を一つ吐き、明るかった表情を陰^{かげ}らせた。

「あれはあっちが悪いんだからね！　私はただ一緒にご飯食べようって誘っただけなんだからっ！」

「でも、彼女たち嫌がってた」

「もうこっちから願い下げよ！　二度と誘ってなんてあげないんだからね！」

憤慨した様子で笹原はカレーをかき込む。水を一気に飲み干すと荒々しくテーブルにコップを叩き付ける。

「一人でご飯食べるのは寂しい？」

「え？　う、うん……まあね」

奏の質問で笹原の勢いが失われる。少しの間俯^{うつむ}いていたが、顔を上げて逆に奏に質問し返す。

「なら立華さんは？　立華さんは一緒に食事する人はいないの？　寂しくないの？」

「私は……」

奏は麻婆豆腐の最後の一口を食べると、口を開く。

「私はいいの。前は一緒に食べる人もいたけれど、いいの」

「どうして？　その人たちとはもう一緒に食べないの？」

「だって——みんな消えてしまったから」

「っ！」

奏は表情を変えることなく、淡々と言葉を紡ぐ。

「例え一緒にお昼ご飯を食べても、仲よくなっても、いつかはみんな消えてしまう。ここはそういう世界だから。だから、私はいいの。一人でいいの」

「立華さん……」

二人の間に沈黙が流れる。

周囲は未だ昼の喧噪に包まれているというのに、二人の時間だけが止まってしまったかのように、静まりかえっていた。

「それじゃあ」

奏が立ち上がる。空になった皿を乗せたトレイを持ち、指定の場所に置きに行こうとする。

「なら……私が！」

「え？」

奏の背中に笹川が声を投げかける。

奏は振り返り、笹原の顔を見る。笹原はとても真剣な表情をしていた。

「私が一緒にご飯食べるよ！ どうせ私も相手いなかったんだし。ねえ、また一緒に食べよ？」

「でも、私は——」

言いかけた奏の言葉を笹原は遮る。

「ならたまに！ いつもじゃなくてたまにならいいでしょ？ ね？ ね？」

「……………」

二人はにらめっこを続けたが、やがて奏が笹原の強引さに根負けする。

「わかったわ。たまになら」

「やったー！」

笹原が大声を上げて喜ぶ。周囲の目を一身に集めるが、本人は気

にした様子がない。

「なら、改めてよろしく！ 私はカリン・ササハラ……じゃなくて、笹原かりん。かりんでいいよ！」

笹原——かりんは笑顔を浮かべて手を差し伸べる。

奏はかりんの手と、手のトレイとを見比べた後、トレイを一旦テーブルに置き直すとおずおずと手を伸ばす。

その手をかりんがしっかりと握りしめてもう一度言う。

「よろしく！」

「うん。よろしく……」

こうして二人は出会い、この日から奏はかりんに付きまとわれるようになったのだった。

その？ 出会いは麻婆豆腐と共に（後書き）

さて、始まりました。奏とかりんの物語。

かりんは奏とは対極的に活発で強引なところがある女の子をイメージしています。そんな二人がこれからどんな絡みをしていくのか、期待してもらえると幸いです。

今日は休日ということで、熱が冷めないうちに一気に書いてしまいましたが、次の更新はもう少し時間がかかるかもしれません。

それもあって、今回は少々長くなっているかもしれませんが、次のはこれよりは短くなるかもしれません。でも同じくらいかもしれないません。この投稿になれていないのです。ご了承下さい。

それでもこの始まった物語。始まる前の物語。最後までお付き合いしてもらえると嬉しいです。

その？ 変化する日常

「立華さん、お昼ご飯食べよっ？」

「立華さーん、一緒に帰ろー？」

「たっちばっなさーん!!」

「……………はあ」

笑顔で手を振りながら駆け寄ってくるかりんを見ながら、奏は小さく溜め息をついた。

「ねえねえ。帰ろうよ！ ほらっ！」

かりんはそんな奏のことなどお構いなしに腕を引っ張ってくる。

「いい。一人で帰る」

奏は冷たく突き放すような口調で言い、腕を払いのける。

「えー？ なんでー??」

しかし、奏の態度もかりんにはどこ吹く風。再び腕を掴むと、ぎゅっと力を込めて今度は放されないようにする。

「いいじゃんたまには。ねえってばー」

「たまにはって……」

腕をぶんぶん振り回すかりんに半ば呆れつつ、奏は再度嘆息する。

「こここのところ毎日じゃない」

そうなのだ。あの日以来、なにかにつけてかりんは奏に付きまといてくるようになり、毎日のように世話を焼いているのだった。

たまにと言ったかりんだったが、まるで一度餌をやった犬がそれを覚えていて、顔を見るだけで寄ってくるように、奏と顔を合わせるたびに満面の笑みを浮かべて近付いてくるようになってしまったのだ。

「それじゃあ、一緒に帰れないわけでもあるの？」

「それは……ないけれど」

「ならいいじゃん。よし、けってーい！」

「ちよっと……」

結局かりんに引きずられるような格好で一緒に帰宅することになってしまった。なんだかんだ言いながらも、はっきりと断らない奏にも原因があるのかもしれない。

「じゃあ、着いたから」

自分の部屋の前まで来て、奏はかりんの腕を放させて別れを告げる。

「——ってえ、早っ！ 早いよ!？」

「だって、寮だもの。当然じゃない」

学校に通う生徒は皆、学校の寮に住んでいる。

この世界にやってきてクラスが割り振られるのと共に与えられるこの寮は、学校から徒歩にして五分も離れていない場所に建っており、一緒に帰る必要すらないほど近いのである。

「近い。近すぎるよ！ 一緒に帰るって言ったらもっとう、ねえっ？」

「ねえって言われても」

不満げに唸るかりんを横目に、奏は自室のドアのノブに手をかける。

「あ、あのっ！」

すると突然、かりんが弾かれたように声を上げる。

「なに？」

「あの、あのね。せっかくここまで来たんだし、家に……」

「……？」

かりんの言葉はどんどん尻すぼみになっていき、最後まで聞き取ることができなかった。

「えっと……」

「な、なんでもない、なんでもない……」

首を傾げる奏に両手を突き出して振りながら、かりんはなにかを誤魔化すように笑う。

「そ、それじゃあ！　また明日ね！」

「あ……」

そして止める暇もなく、かりんは走り去ってしまった。後ろ姿を見送りながら奏は、目をぱちくりさせて首を更に大きく傾けた。

「ねえ、この『特別授業』ってなに？」

かりんが尋ねる。

「あのね——」

この世界に来て間もないかりんに奏が説明する。

特別授業とは、月に一度行われる特別な講義のことで、通常の間割とは別に組み込まれている。

この講義ではやる内容が毎回違っていて、時には理解しがたい奇想天外極まりないものも存在する。

「なんのためにそんなものを……」

「『様々な体験をすること、生前できなかったことをさせて未練を消化するため』らしいわ」

「それで、どんな授業があるの？」

「そうね、例えばこんなものもあったわ——」

「よーっし、みんなー！　筋肉鍛えてるかー？」

「き、筋肉……？」

「筋肉筋肉ー！」

「き、筋肉筋肉……」

「声が小さいー！　お前たちの筋肉が泣いているぞ！　ほら、筋肉筋肉ー！」

「き、筋肉筋肉ー！」

「おーし、いいぞ。筋肉が唸ってきたぞ！　筋肉筋肉ー！」
「筋肉筋肉ー！」

「もっと、もっとだ！ 筋肉筋肉！」

「筋肉筋肉——！」

「来た来たああああ！ これが、筋肉革命だああああ——！」
どっかーん！

「……なにそれ」

かりんが眉をひそめる。

「さあ。よく分からなかったわ」

「それで未練が消える人とかいるの？」

「さあ」

さすがのかりんも若干引き気味だった。

そこまで意味が分からないものはそうないが、果たして今回の特別授業は一体どんなものになるのだろうか。

「それでは特別授業を始めます」

始業のチャイムと共に講師が教室に入ってくる。席に着いたかりんはどことなく不安げだ。

「今日の特別授業は——社交ダンスです。皆さん、着替えて体育館へと移動して下さい」

なんだ、今日のはまともなのね。

奏はそう思いながらちらりとかりんを見る。

しかし、かりんは何故か表情を曇らせていた。

着替えて体育館に向かうまで、かりんは奏に絡んでくることもなく、終始無言だった。

体育館に着いて、男女がペアになって社交ダンスを踊り始めた。ダンスの経験などない奏は見様見真似で踊ってみるものの、中々上手くいかない。教えられた通りに動いてみても、相手役の男子との呼吸が合わないのだ。

「……え？」

ぎこちなく動きながら、きつと同様に慣れない動きに苦戦しているのだろうと思ってかりんに視線を向けた奏は、目に飛び込んできた光景に驚きを隠せなかった。

そこには、完璧に踊りをこなすかりんの姿があった。

相手の男子を完全にリードする形で、右に左に華麗なステップを踏んでいく。その動きは指先に至るまで流麗で、気が付けば周囲の生徒達も踊ることを忘れて釘付けになっていた。

「ふう……」

踊り終えてかりんが一息つく。その額にはうっすらと汗がにじんでいる。

終わると同時に、かりんに浴びせられる歓声と拍手。しかし、当のかりんは終始浮かない顔をしていた。

授業も終わり、生徒たちはそれぞれ着替えを終えて帰宅していく。奏も同様に帰ろうと思ったが、いつもなら放課後になると真っ先に飛んでくるかりんがやってこない。見ると、まだ席に座ってじっとしていた。

「――かりん、どうしたの？」

別に気にかける義理はないのだが、普段は元気よく寄ってくるかりんがこの様子ではどうにも調子が狂う。奏はかりんに歩み寄って声をかける。

「え？ あ、立華さん……」

突然声をかけてきた奏に驚いた様子でかりんが答える。

「どうしたって、なにが？」

「だって、なんだか元気ないから」

「あ……」

かりんが俯く。

奏がじっと見つめていると、ためらうようにかりんがちらちらと

見上げてきた。やがて決心を固めたように顔を上げると、ゆつくりと口を開いた。

「あのね、聞いて欲しいことがあるんだけど、いいかな？
いつになく遠慮がちな言葉に奏は一瞬考えて尋ねる。

「いいわ。なんの話？」

「私の——ここにいる理由、かな」

その？ 変化する日常（後書き）

まず始めに、ちょっとおふざけがすぎたかなって反省してますこんにちは。

さて、前回に続きかりんに振り回される奏の物語、いかがでしたでしょうか？奏のキャラが若干崩壊してないか？なんてことは考えたら負けです。アニメ最終話の奏に比べたら（ryおっと、なんでもありません。

本当は理由まで書いてしまってから上げようと思ってたんですが、そうすると長くなりそうだし、とりあえずここで上げること。

サブタイトル思いつかなくて適当なんてことももちろんありません。ご安心ください（？）

さて、この物語。あまり長く書くつもりはありませんので、これで大体折り返し地点にきたと考えていいでしょう。

一週間ぶりの更新となってしまうましたが、次はもう少し早く上げられると思います。きつと。

そしてかりんの過去、それを聞いて揺れ動く奏の心、最後の結末なんかを書いて行ければと思っています。きつと。

JAMのSKILLなんかをBGMに頑張って書いていきますよ。

KITTO！KITTO！

ラストの仕上げに向けて突っ走っていきたいなーなんて思ってます。それでは引き続き、次もお付き合いただけると幸いです。

その？ 消えない想い

二人は校舎のそばに設置してあるベンチに座っていた。

グラウンドを見下ろすと、運動部が練習に励んでいる姿が目に見える。あの中には二人と同様に消えることのできないでいる人間がNPCに混じって汗を流しているのだろう。その一人一人が生前に経験した理不尽なにかを抱え、苦しみながらも今を懸命に生きているのだ。例えば死んでしまっていたとしても、確かにここで生きているのだ。

そして今、奏の横で黙り込んでいる少女もそのうちの一人だ。普段は一度開けられたら止めどもなく音を発し続けるその口も、今はぎゅっと結ばれている。

「……あのね」

「うん」

なにを見るでもなく、前を眺めていたかりんの口がようやく開かれる。奏は邪魔をしないように軽く相槌を打つ。

「私のお父さんはね、大使として働いてたんだ——」

かりんの父親は大使として西南アジアのとある国の大使館に勤めていた。

あまり治安のよくなかったその国では、家族であるかりんの母やかりんも共に大使館内にある居住区域に住まい、日々を大使館で過ごしていた。

大使館の暮らしと言えば華やかなものに思えるかもしれない。実際、それは普通の人々が経験しないようなものだった。

だが、大使館内という狭い世界においてできることなど限られており、そんな毎日の中でのかりんの行動は父親によって制限されたものだった。

「私は毎日テーブルマナーを守られ、きちんとした言葉遣いや社交ダンスなんかを叩き込まれた。それもこれも全部、あの人が見栄

を張るため。私を見せつけて自己満足に浸るためだったの」

かりんの父親は大使館で頻繁に行われるパーティにかりんを出席させ、自身の娘を来客者に紹介しては賛辞を受け取っていたのだ。

そのためにかりんは好きな服を着ることも、自由に走り回ること、大声で笑うことすら許されてはいなかった。寝起きの時間すら決められた毎日の中でかりんの自意識などは存在しなかったのだ。

「私はやりたいこともできず、なにかもあの人の言いなりになっていた。あそこでの私は人間じゃなくて、あの人のお人形、大使館っていう狭いかごの中で自由に飛び回れない小鳥と同じだったんだ……」

そして、かりんは父の大使としての公務での移動中に、乗っていた車が反政府組織の過激派の襲撃に遭い、父や母共々命を落としてしまったのだった。

「結局私はなに一つ自分で決めることもできず、そのまま死んでしまった。なら、私の人生ってなんだったの？ 自分がない人生に意味なんてあるの？ それ以前に、私は生きていたって言えるの？」

かりんは沈痛な面持ちで呟くように言う。その瞳には大粒の涙が浮かんでいた。

「私は最初から最後まで他人に支配されていた。行き方も、死に方すら人に左右されて、私は一体なんのために生きていたの？ こんなのってないじゃない。私は、このままじゃあどこにも行けやしない。生きているうちにはなに一つすることができなかった。私はただ、嬉しいときは大声で笑いたかった。悲しいときは大声で泣きたかった。食べたいものを食べて、眠くなったら好きな場所で寝転がったり、走ったり、跳んだりしたかった。私は……」

かりんの言葉が途切れる。目の端から涙が溢れ出しそうになるが、懸命にこぼれないように耐えている。もはやその行為を咎める人はここにはいないというのに。

「かりん……」

奏はかける言葉も見つからないまま、ただかりんを見つめる。こ

んなときにどうすればいいか分からない自分を情けなく思っていた。
「……ごめんね。急にこんなこと」

俯いていたかりんが顔を上げる。その目にはもう雫は残っていなかった。

「迷惑だよね……本当にごめんね？」

かりんが申し訳なさそうにする。悲しげな表情を見せまいと無理矢理笑顔を形作っているのが容易に感じ取れた。

「そんなことないよ」

奏は、かりんの告白に答えるように言葉を紡ぐ。

「そんなことない。迷惑なんかじゃない。嬉しかった。かりんが教えてくれたこと」

奏は思っていること全てを言葉にして表わすのは苦手だ。それでも、自分の心の中に確かにある気持ちを、形を変えないように一語ずつゆつくりと伝えていく。

「ありがとう。私に伝えてくれて。ありがとう、かりん」

「立華さん……」

かりんの目が驚きに見開かれる。そして、再び笑顔を顔に浮かべる。今度の笑顔はとても自然で、綺麗だった。

「ありがとう、立華さん」

目を細めて笑うかりんにつられて、奏の顔にも自然と笑みが浮かんでいた。

その？ 消えない想い（後書き）

さて、今回はちょっと短いですが、区切りがいいので。

でもこのくらいが普通なのかなあとか考えたりもします。だって他の人と比べてみると話数と文字数の比率が！

まあうちはうち。よそはよそ。我慢しなさいの精神で行きましょうか。

大使館の下りは完全なフィクションです。こんな大使存在しません。イメージです。怒らないで下さい。

最初の自己紹介のときにカリン・ササハラとか言ってたのは海外に住んでたフラグだったわけですがどーでもいいー。

これで残すはあとわずか。その？で終わる予定ではありません。

でも最初はその？で終わる予定だったからなんとも言えませんがw
それでは残りあとわずかとなったこの物語、最後までお付き合いいただけると幸いです。

その？ 揺れ動く心

「立華さん」

いつものように帰りのホームルームが終わった後、帰宅の準備をしている奏にいつものようにかりんが声をかける。奏も、もはやそのことについて、とやかく言うことはなくなっていた。

「さっきの話なんだけどさ、どう思う？」

下校途中、かりんが不意に尋ねる。

「さっきのって？」

質問の意図がいまいちつかめなかった奏が質問で返す。

かりんは、だから、さっきのホームルームで先生が言っていた、と前置きして、

「生徒会役員選挙のことだよ」

と、説明をする。

「そのことね」

ならば始めからそう言えばいいではないかと思いながら、奏は続ける。

今日のホームルームで、来週の頭で生徒会の役員を募るので、今週中に考えておいて欲しいといった話が出たのだ。聞くところによると、これまで生徒会長を務めていた人物がこの世界から消えてしまったためらしい。

生徒会の役員、特に生徒会長や副会長といった主要な立場には、NPCではなくて人間の生徒が収まることが多い。

NPCだとしても個性が欠如してしまっているために、多種多様な生徒の要望に応えることが困難になってしまう。なので命令を下される側はNPCでも構わないが、下す側は人間であったほうがなにかと都合がいいのだ。

「それで、その生徒会役員選挙がどうしたの？」

「立華さん、立候補とかしないのかなーって」

「……私が？」

思いがけないかりんの言葉に、奏の反応が遅れる。
きょんとする奏に、かりんは更に続ける。

「うん。どう？」

「どうもなにも……考えたこともなかったわ」

奏は何故かりんがそんなことを言い出したのかと疑問に思いつつ答える。

「第一、人を束ねるだなんて、私には向いていない気がするわ」

「えー、そうかなあ？」

しかし、かりんは食い下がってくる。

「だって、立華さんいつも規則だなんだって言ってるじゃない。それならいっそ取り締まる側になってしまえばって。案外やってみると似合う気がするんだけど」

「そうかしら……」

自分では全くそうは思わないのだが、かりんには生徒会に入ることが向いているように見えるらしい。というか、普段からそんなにも口うるさく言っていただろうか。

奏は考えつつ、自分が生徒会に所属している姿を想像してみようとする。しかし、どうにも他人を指揮している自分が思い浮かばなかった。

「止めておくわ。私にはやっぱり合わない気がするもの。それに……」

「それに？」

「……なんでもないわ」

奏はなるべく人と関わることは避けたかったのだ。この世界は去りゆく人の世界だ。遅かれ早かれ皆、旅立ってしまう。だから多くの人と関わることになる生徒会に入る気になど、とてもではないがなれそうになかった。

人と関わりたくないと言いながら、最近ばかりんに構いっぱなしになっているという事実には、知らず知らずのうちに目を逸らして

いた。

「そうかあ。まあ、本人が言うならそうなのかもね」

今度はあっさりとかりんも引き下がった。元から強く推す気もない、ただの思いつきだったのだろう。

その話もそこで終わり、話題は今日の授業のことなどに移る。だが、どうしてか奏の脳裏には、雑談しているときも、かりんと別れて自室に戻ってから、生徒会役員選挙のことが貼り付いて離れなかった。

それから何日かが過ぎ去り、週末の放課後。生前で言うところの金曜日。

この世界にも休日はある。生徒達は思い思いの休日の過ごし方を話し合いながら帰宅していく。

喧噪けんそうの中、奏はなにも変わることなく帰り支度を進める。どうせ休日はいつものように部屋の中で本を読んで過ごすのだ。教室の高揚した雰囲気とは縁がなかった。

そしてかりんと共に学校を後にする。二人でたわいのない話をしながら帰るのもすっかり日常になってしまった。

「……あ」

不意に奏が立ち止まる。

急に足を止めた奏の二歩ほど先でかりんも止まり、奏を振り向きながら尋ねる。

「どうしたの？」

「教室に忘れ物をしてしまったみたい」

今日は体育の授業があったのだが、体操服を入れた袋を机の横に掛けたまま忘れてきてしまったのだ。奏の手にはいつも授業の用意を入れている鞆しか握られていなかった。

教科書などならともかく、体操服を忘れてしまったは大変だ。しかも今日は金曜日である。次に学校に来るのは月曜日だというのに、

さすがに放ってはおけない。もっとも、奏の性格的に、例え忘れたのが教科書だとしても気付いた時点で取りに行っただろうが。

「ちよつと取りに行ってくるから。先に帰っておいていいわ」

「あ、立華さ——」

かりんにそう告げると、奏は回れ右をして教室へと走って戻っていった。後ろからかりんがなにかを言いかけていたようだが、奏には聞こえなかった。

「……もうっ、立華さんったら」

残されたかりんは、自分一人を置いて去ってしまった奏に膨れる。そして、これからどうしようかと考える。

奏の言う通りこのまま帰ってしまってもいい。学校と寮までは目と鼻の先なのだ。家に着くのにそう時間はかからない。

「よしっ、決めた」

わずかな逡巡しゅんじゆんの後、かりんは奏を追って学校へと戻ることにした。こっそりについて一緒に帰ろうと思ったのだ。

もう姿が見えなくなってしまった奏と同様に、かりんは来た道を戻り始めた。

奏が教室に戻った頃にはすでに多くの生徒が帰宅したり部活に行ったりで、あまり多くの生徒は残ってはいなかった。

奏は自分の席に行き、机を確認する。そこには確かに体操服を入れた袋が残されていた。

それを手につかむと、他にも忘れ物がないか一応確認し、なんにもないことを確かめてから奏は教室を後にしようとする。

「立華さん」

扉に手をかけようとした奏を呼ぶ声に、奏は手を引っ込めて振り返る。

「ちょっと、いいかな？」

奏を呼び止めたのは、同じクラスの女子生徒だった。

「なにかしら？」

「笹原さんのことなんだけど……」

そう言われて、初めて奏は彼女が以前かりんと口論していた生徒だと思い出した。

「大丈夫？」

「……大丈夫って？」

彼女が一体なんのことを言っているのかが分からず、奏は聞き返す。

「ほら、立華さん最近付きまとわれてるみたいだから」

「……………」

「もし迷惑なら言ってね。いつでも力になるから」

きつと彼女は純粋な親切心で言っているのだろう。それは分かる。実際、彼女の顔は奏を案じているように不安げで、善意しか感じなかった。

「立華さん、大人しいから。それで嫌でも断れないのかもしれないけど、相談に乗るからね！」

だが……

「違う。違うの」

「え？」

突然の否定の言葉に驚く彼女に、奏はゆっくりと答える。

「私は、迷惑なんてしていない。私は、私の意思でかりんと一緒にいるの。私は、かりんといえるのが楽しいからいるの。だから、ありがとう。だけど、違うの」

「……そう、なんだ」

彼女が黙り込む。

「ごめんなさい」

それでも彼女は自分のことを思っ言ってくれたことは分かっているの、奏はその心遣いを無下にしてしまったことを謝る。

「ううん、いいのよ。立華さんがいいならそれで。私のほうこそ余計なことを言ってごめんね」

奏の言葉を受けて、彼女も笑顔で首を振った。

それからまだ教室に残っていくと言う彼女と別れ、教室から出る。もちろん、その手には鞆と袋が収まっている。

「……あれ？」

「つと、はは……」

教室を出たところで、奏はよく知る人物と出会った。かりんだ。

先に帰ってくれと言っておいたかりんが何故かここにいる。どうやら後を付いてきたらしい。

「い、いや、どうせなら一緒に帰ろうと思ってさ」

奏がなにも言わないうちからかりんが言い訳をする。

そのかりんの姿を見て、奏は驚く。何故ならかりんは――

「ねえ、もしかしてさっきの話聞いていたの？」

「うえ！？ さ、さっきのってなんのこと？」

明らかに動揺するかりんが更に言葉を重ねる。

「な、なにも聞いてないよ。うん、なにも」

慌てて視線をさまよわせるかりんから目を離すことなく、奏は静かに質問する。

「ねえ、かりん。……なんで、泣いているの？」

「へ……？」

そう、かりんは――泣いていたのだ。

当のかりんが、言われて自分の顔に触れる。

「え……なんで……」

そして手に付いた雫を見て、初めて自分が泣いていることに気が付いたように漏らす。その間も、かりんの瞳からは後から後から温かな液体が溢れ出してきた。

「……そうか、そうだったんだ……私は、本当は……」

うわごとのように呟くかりんを、奏が心配そうに見守る。

「はは……そっか。そっか……」

「かりん……？」

「……ねえ、立華さん。一つ、お願いがあるんだ。聞いてくれる？」

奏が声をかけると、かりんが顔を濡らしたまま、奏に問いかける。
その顔には穏やかな笑みが浮かんでいた。

「明日一日、私に付き合って——」

その？ 揺れ動く心（後書き）

さて、二日続けての投稿でしたが、今回はいかがだったでしょうか。いくら連続でも、さすがに学校の研究室で先輩たちの目を盗んでこっそり書いていたなんてことはありませんよ？ ええ、全く。

今回のことで見事に奏が生徒会長になるフラグを建てることができましたね。褒めてくれてもいいんですよ？（作者がフラグとか言うべきではないと思いますが……ww）

はてさて、そんなこんなでここまで続いた物語、次回で最終回でございます。

短かったようで長かったこの物語。……え？ 短かったですか？ そうですか。

何事にも終わりというものがあり、日本のことわざにも『終わりよければ全て良し』というものがある通り、終わりはものすごく大切なものなのです。なにが言いたいかと言いますと、効果的に終わりを演出できるか若干不安なのですよねー。まあ、持てる力を振り絞って頑張りますとも！

それでは、ここまでお付き合いいただけた皆さんには、是非とも最後までお付き合いしてもらえると幸いです。

その？ 約束は再び出会うときのために

翌日、普段は生徒達で溢れかえっている学校から人気がなくなる休日。
いつもは部屋で黙々と本を読んだり、花壇の世話で一日を終え、用事らしい用事がない奏も今日ばかりは予定が入っていた。かりんに一日付き合う約束をしていたのだ。

二人は校門の前で待ち合わせていた。

普段の制服とは変わって活動的な服装のかりんに対し、奏はなんの変哲もない制服姿。休日だというのに。

「……なんで制服？」

「校則で決まっているもの」

確かに休日でも外出時には制服の着用を義務づけるという校則はあるものの、それを実際に守っている生徒など他にはいない。破っても咎められることすらないような規則だろう。

それでも律儀に守っている奏にかりんが苦笑しつつ、二人は日の光の下、歩き始めた。

奏が花壇を案内したかと思うと、かりんが立ち入り禁止だからと渋る奏を強引に引っ張って河原へと足を運ぶ。

そうしているうちにすっかり日は暮れ、二人は寮の前まで帰って来た。

「ありがと！ 今日楽しかったよ」
かりんが笑顔で言う。

「私も。疲れたけれど、楽しかった」

奏もそれに答える。その顔にはかりんにつられたようにうつすらと微笑みが浮かんでいた。

「それじゃあ」

「あ……」

いつものように奏の部屋の前まで来ると、奏がドアのノブを掴む。すると、かりんが慌てたように声を漏らす。

「？」

「あの、えっと……」

首を傾げる奏に、かりんがなにかを言いたげにして言葉を詰まらせる。

「どうしたの？」

「うん、あのね……もう一つお願い」

今日で最後だから、とかりんが呟く。最後とは一体どういう意味だろうか。

不思議に思う奏に、決心したようになりんが両手をぎゅっと握りしめながら、かすれるような声で頼んだ。

「立華さんの部屋に、入れてくれないかな……？」

奏に部屋へと招き入れられたかりんは落ち着かない様子で忙しなく視線をさまよわせていた。座るように促されて何故か正座をしている。

「なにをきよろきよろしているの？」

「ふえ！？」

奏に尋ねられて、かりんが跳ねるように反応する。

「いや、その、はは……」

焦ったように笑って誤魔化すかりんを奏は訝しく思う。

「ほら、なんか殺風景だなんて。女の子の部屋なのにぬいぐるみの一つもないし」

「私、あまり物を置かないから」

「そ、そっかー。はは、は……」

室内に気まずい沈黙が流れる。

こんなときにどうしたらいいのか分からない奏が黙りこくってい

ると、

「あー、もうっ」

かりんの我慢出来なくなったような声が静寂を打ち破った。

「違う。違うんだよ。私はこんなこと言いたかったんじゃないのに。どうして私はこうなのかなあ」

「ねえ、今日はどうしたの？」

頭をがしがしと掻きながら唸るかりんを助けるように、奏が声を掛ける。

「急に一日付き合ってたなんて」

「あ、うん……」

奏の問いかけに、かりんが大人しくなる。

「この前泣いていたのと関係があるんでしょう？ どうして泣いていたの？」

核心を突く奏の言葉に、かりんはうつむくが、しばらくじっとしていたかと思うと顔を上げて真っ直ぐに奏の目を見据えた。

「……あのね、前に言ったでしょ？ 私がどうしてここにいてること。やり残したことについて」

「うん」

「あれね、ちょっと違ったんだ。間違ってはなかったんだけど、正しくはなかった」

少し間を置いて、再び口を開く。

「あのとき泣いてたのはね……嬉しかったんだ」

「嬉しかった？」

「うん。立華さんが言ってくれたことが。へへっ」

かりんが弱々しく微笑む。そんなかりんを奏はじっと見つめていた。

「だって立華さん、私のこと迷惑に感じてるんじゃないかって思ってたから。人とあまり関わりたくないって言ってたし。だから、望んで一緒にいてくれるって聞いたら嬉しくて、それでつい、ね」

「そう……」

人と関わりたくないというのは奏の本心だ。結局別れる運命なのだから、最初から出会わなければ悲しみは少なくて済む。だが、あのとき口から出た言葉も確かに本心だった。

「それで、ね。お願いが、あるんだけど……。お願いばかりだけどさ」

「いいわ。なに？」

「えっと……。ね」

しばらくもじもじと指を動かしていたかりんが、緊張した面持ちで叫ぶ。

「私と……お友達になってくださいっ！」

一息に言い切ったかりんが膝の上で握り拳を両手で作り、おびえるように目をぎゅっとつぶる。

「……かりん」

「っ！」

奏がかりんの名を呼ぶと、かりんがびくりと震える。そんなかりんにどこか呆れた様子で答える。

「なにを言っているの？」

「……え」

「私はもう友達のつもりだったんだけど。違ったかしら？」
「!？」

奏の言葉に、かりんが目を見開く。そして、体が痺れが解けたかのように弛緩し、両手を床について安堵の溜め息をつく。

「そっか……。そっか……」

うわごとのように呟くかりんが笑みを浮かべる。その瞳には昨日と同じ、暖かい液体が溜まっていた。

「そっか……。ごめんね？ 私、友達できたの初めてだから、どうやって友達になるか分かんなくて、だから……」

「かりん……」

かりんはぼつりぼつりと独白を始める。

大使館には同じ年代の子供がいなかったこと。大使館の塀の向こ

うで遊ぶ子供達をただ見つめることしかできなかったこと。眺めながら、自分も混ざりたいと思ってても叶わなかったこと。

「私が本当に心残りに思っていたことは、友達がいなかったことなんだ。一度でいいから友達と遊んでみたかった。一緒に学校に通って、一緒に休日に遊んで、その友達の家にお邪魔したりしてみたかったの。でもそれも叶った。立華さんのおかげで――」

「奏」

「え?」

「奏、でいいわ。だって私たち友達なんですよ?」

結局、この少女は不器用なのだ。

まともな人付き合いを知らず、友達すらいないまま生涯を終えてしまったこの少女は、他人との距離の取り方が分からなかったただけなのだ。

だから人から疎まれるほどに近付いてしまったかと思うと、こうして家に遊びに来ることや呼び方など些細なことで躊躇ちゅうちゅうして遠慮してしまう。奏も相当に不器用だが、かりんはそれ以上だったのだ。

「……奏」

「なに?」

「奏、奏、奏!」

かりんが嬉しそうに奏の名を何度も呼ぶ。その笑顔は幸せに満ち溢れており、とても満足げだった。

「……かりん」

それを見ながら奏が言う。嫌になるほど理解してしまっていることを、口にする。

「あなたも……消えるの?」

「……………」

かりんの笑顔にわずかに陰りが生じる。そして、申し訳なさそうに答える。

「うん……私の心残りは消えてしまった。もうここにいる理由はないもの」

「そう……あなたも行ってしまうのね」

寂しげに呟く奏の手を取り、かりんが優しげに微笑む。

「ごめん。本当は大切な友達を残して行きたくないけれど、それ以上には満たされてしまった。もう、心が溢れちゃったの。ありがとう、奏。奏には大切なもの、いっぱいもらった。なのに私はなにもしてあげられなくて、ごめん」

かりんの言葉に奏が首を横に振る。

「そんなことない。私も、かりんにいろんなものもらったよ？ かりんに会えてよかった。今なら心からそう言うことができる。私のほうこそありがとう」

「奏……」

涙ぐむかりんが、別れを惜しむように言葉を重ねる。

「私が消えてしまったら奏はまた一人になってしまう。私はそれだけが気がかりなの。だから約束して？ もう人と関わりたくないなんて悲しいことは言わないって。別れのせいで出会いを捨てるようなことはしないって。奏は笑顔がかわいいもの。それをもっとみんなに見せてあげて？」

奏がふつと笑みをこぼす。それは今までで一番綺麗で、儚げでありながら確かな存在感を放ち、魅力的であった。

「わかった。もしかしたら、ここから消えてしまってもすぐにどこかに行くわけではないのかもしれない。どこかで順番待ちとかするのかも。なら、かりんが寂しくないように、私は少しでも多くの人の未練を消してそっちに送るわ。それが私なりの人との関わり方。約束する。もう私は人から逃げない」

「うん、奏には素敵な力があると思うの。私にくれた物、みんなにも与えてあげて？ それでいつか、奏の未練も消えたら……また遊んでくれる？」

「当然じゃない」

「そっか。ありがと……。もう本当に未練、なくなっちゃったよ」
かりんが泣きそうに笑う。その瞳にはしっかりと焼き付けるよう

に奏の姿が映っていた。

奏の瞳にもまた、かりんが映っていた。二人の視線が一つになり、繋がった両手に力が入る。

「それじゃあかりん。またね」

「うん、またね。奏」

本当は言いたくなかった別れの言葉を口にして、奏が瞬きを一つすると、次に目を開いたときにはそこには誰もいなかった。

「元気で……」

呟いた声は誰もいない部屋の中で拡散する。だが、きっとその音は彼女の耳に届いたのだろう。そう信じたい。

感触を失った手には、しかしいつまでも暖かみが残っていた。

週末が終わり、再び学校へと行く。

教室に入り、ホームルームが始まるまでの間、何気なく教室中を見渡す。ふと、奏の目に一つの机が映る。

その机にはもはや誰も座ることはない。すぐに片付けられ、そしてしばらくすれば、また新しい机が運び込まれるのだろう。

もうこの教室にあの騒がしい声も、奏の腕を強引に引っ張る手も存在しない。だが、奏の胸の奥には確かな形となって残っているものがあった。

始業のチャイムが鳴り、他の生徒達も席へと着く。ドアから教師が入ってきて教壇へと上がる。

出席を取り、先週までは呼ばれていた名前が呼ばれなかったことにわずかな痛みを感じながらも、ホームルームは終わりへと近付き、最後に教師が言う。

「先週話していた生徒会役員選挙の件だが、誰か立候補するものはいるか？」

周囲の生徒が静まりかえり、教師が再び言葉を発しようとしたとき、教室の真ん中の辺りから小さな手が挙げられる。

教室中の生徒や教師の意外そうな目線を受けながら怯むことなく、少女ははっきりと口にする。いなくなってしまった一人の大切な友人のことを思いながら。

「生徒会長に、立候補します」

〈おわり〉

その？ 約束は再び出会うときのために（後書き）

よっしゃあ、完！！

当初よりも長くなってしまったこの物語、これにて終幕とさせてもらいます。楽しんでもらえたでしょうか？それならばなによりです。この後、生徒会長になった奏が、自分のことを天使と言い張る一人の少女と出会うのはまた別のお話。

二人が遊ぶシーンももっと書くかと思ったんですが、蛇足になりそうなので大胆にカット。

最後の演出を思ったようにできたのならよかったです。締めの方へもっと学ばべきものがありそうです。

最後にあれやこれや語るのほそれこそ蛇足というものでこちらで締めさせてもらいます。もう遅い気もしますがw

それではここまで読んでくれた方、どうもありがとうございました。この物語があなたの心になにかを残すことができたならこれ以上の喜びはありません。

では、お別れとさせてもらいましょう。再び巡り会うときを祈りつつ。

ありがとうございました。

沖津渉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2050m/>

そして天使は舞い降りた

2010年10月8日13時52分発行